

タイトル	木下利玄『銀』初版本評釈(上)
著者	田中，綾；山田，航；TANAKA, Aya; YAMADA, Wataru
引用	北海学園大学人文論集(55): 158(五七) -104 (一一一)
発行日	2013-08-31

木下利玄『銀』初版本評釈（上）

田 中 綾・山 田 航

『銀』は木下利玄（明治十九・一八八六～大正十四・一九二五年）が二十八歳で上梓した第一歌集である。大正三（一九一四）年五月二十六日付けで、東京麹町区の洛陽堂から、白樺叢書の一冊として刊行された。

装釘は、フランスから帰朝した画家・有島生馬と、三浦直介が手がけた。四六版変型の天金の書で、「竹紙の表紙、銀泥の見返し銀水引の葉までに及んで、（略）余程凝つたもの」（新井洸「新刊紹介」）「心の花」十八巻七号、大正三年七月）と、当時は装釘の美しさでも話題となっていた。復刻版を手にしても、白い背、見返しと箱の銀色が上品で、一頁三首組みのゆつたりした編み方が目にもやさしい。

「街をゆき子供の傍を通る時蜜柑の香せり冬がまた来る」（第二歌集『紅玉』大正八年）、「牡丹花は咲き定まりて静かなり花の占めたる位置のたしかさ」（第三歌集『一路』大正十三年）などで知られる木下利玄だが、第一歌集『銀』に関する研究は、紅野敏郎、日笠祐二の実証的な論考以降、とくに一九八〇年代以降はあまりなされていない。その理由として、以下の三点が挙げられる。一つには、『銀』所収の作品は習作段階とみなされていること。二つには、利玄が推敲を重ねる歌人であり、初出や歌会作品、選集、歌集までの異同を追う地道な研究が必要であること。三つには、二つ目とも関係するのだが、現在定本とされている『銀』が、初版本とは歌の配列が異なることである。

・『銀』作品は習作か

(五八)

まず一点目について、『銀』の約四割の作品評釈を手がけた菱川善夫は、次のようにまとめている。「利玄の完成期は、利玄自身の言により、通常大正四年から始まるとされている。(略)川田順は、それよりはやく、大正三年に完成期に入つたとし、『みちのくにて』を、その完成期への飛躍を『予言』する作品として位置づけているのである。その見解からすれば、利玄は『銀』時代の終わりまでは凡庸な歌よみであった』ということになる」(『木下利玄集』『日本近代文学大系55 近代短歌集』角川書店、一九七三年 以下、「菱川(1973)」と略す)。たしかに、後年の高い完成度を基準とするならば、『銀』はそれまでの準備期とみなされるのは自然なことだろう。けれども、『銀』の初版本は、利玄の文学的形を成をつぶさに示している点で看過できないものである。

木下利玄が佐佐木信綱の竹柏園に入門したのは、満十三歳、学習院中等科二年のときであった。『銀』刊行に際し、佐佐木信綱は「学習院の中学生たりし君は、高等学校に入り、大学に進み、卒業して文学士となつた。(略)更に白樺一派の短詩人となつた」(『歌集』『銀』を読み「心の花」十八巻八号、大正三年八月)と、来し方を振り返っている。その言の通り、学習院「輔仁会雑誌」、「心の花」と『竹柏園選集』、「白樺」を初出とする『銀』作品は、へ人間・木下利玄のそのものの形成を示した作品群でもある。

さらに、紅野敏郎は「木下利玄第一歌集『銀』の草稿——白樺派の研究——」(『早稲田大学教育学部学術研究』三〇号 一九八一年十二月 以下、「紅野(1981)『草稿』」と略す)は、従来の『銀』像に新たな観点を与えた。当時、『銀』の草稿が発見されたことを受けての論考であるが、「東京相馬屋製四百字詰原稿用紙」に筆で記された草稿には、歌が切り貼りされ、添削の跡や、配列順に悩んだ跡があったことが明かされている。

そして何より、歌集題に変遷があったという興味深い事実も明かされている。当初は題に「うす黄の菊」と記され、

それが消されて、「わが身」とペンで直されていたというのである。「わが身」という言葉は、『銀』収録の20首目「いましがた我が身のありし丘をよそに汽車は汽車とて走せすぎにけり」と、50首目「人帰りさくらしらみてる、なりわが身ひとつはいかにすべけむ」に使われている。「わが身」＝自身へのこだわりは、「白樺」初期、とくに武者小路実篤や志賀直哉らの小説に顕著であり、学習院中等科以来の「白樺」同人たちとの影響が濃厚であったことは想像に難くない。しかし、それに加えて利玄の場合は、すでに定められた爵位、また、わが子利公をわずか五日で喪うという、宿命的な「わが身」があった。そのような「わが身」の歌群として、『銀』を再読する必要があるだろう。

・推敲過程

「白樺」五卷三号（大正三年三月）の「編集室にて」に、「木下利玄の歌集は『銀』と云ふ名がついた。（略）校正はほとんどすんだ。三校目に又歌をなほして四校をとつたので印刷場の人が不平をこぼしてゐたさうだ」という記述もあるように、歌集刊行の直前まで、木下利玄は作品を入念に手直ししていた。とくに初期作品の異同については、日笠祐二「木下利玄の初期の短歌——『輔仁会雑誌』を中心にして——」（学習院大学「国語国文学会誌」第五号 一九五九年四月三十日 以下、「日笠（1959）」と略す）という詳細な研究がある。

しかし、前述の菱川（1973）の評釈もあるが、『銀』全作品の初出と異同の検証は、これまでなされていない。そこで本稿では、全作品の異同を検証するほか、とくに「心の花」掲載の「曙会記事」との作品異同にも目を配っていくことにする。とはいえ、可能な限りの調査を試みたが、初出を確認できなかった数首もある。これらについては、広くご教示いただけることを切に願っている。

・初版本の歌の配列

さて、最も大きな問題が、『銀』テキストの歌の配列である。初版本では逆年順に編まれているのだが、今日流通する『定本 木下利玄全集』（臨川書店、一九七七年）、また、それに先んじた石樽（五島）茂編『木下利玄全集』（岩波書店、一九二六年）では、編者により歌順が編年体に直され、しかも、制作年代の誤りもあった。日笠（1959）によると、『全歌集』が事件の年代順に再編集してあるため、とかく利玄を論ずる人達が、その点を確認しないで制作年次と思い違いをしている場合もまま見受けられる」、かつ、『全歌集』には学習院「輔仁会雑誌」に掲載された初期作品がほとんど収録されていないことも指摘されている。

斎藤茂吉の第一歌集『赤光』（大正二年）も、初版本は逆年順であった。のち、編年体に直されて今日に定着しているが、初版『赤光』を重んじる研究者も少なくない。前述の紅野（1981「草稿」）で示された、一首一首を切り貼りして歌順を熟考したという木下利玄の構成意識、また、三五〇首以上の作品のなかから二九九首を厳選したことも鑑み、本稿では、初版本『銀』の歌順を尊重したい。「わが身」を表出するにあたって、利玄自身があえて逆年順で編んだことを重く見るのである。そこで、本稿のテキストは、近代文学館名著復刻全集による『銀』初版本（一九六九年）とした。後の評釈でも明らかにするが、初版本と現在の定本とでは、一首に大きな異同がある。

田舎町の料理屋の庭に桃が咲きならべてほせる番傘ひかる

初版本

見透しの田舎料理屋昼しづか桃さく庭に番傘を干す

全歌集、定本など

以下、『銀』二九九首を三回に分けて評釈していくが、山田航（以下・山田）は〈通釈〉と、主に鑑賞を担当、田中綾

（以下・田中）は、語釈、初出や先行研究など解説的な部分を担当した。歌番号は本稿での便宜上のものであり、歌番号の上に「*」があるものは、菱川（1973）で評釈された歌である。初出歌の傍線部は、初版本との異同箇所である。なお、作品の旧漢字は新字に改め、明治・大正期は時代性を加味して元号表記を優先した。

（田中 綾）

我が亡き子利公に

「みちのくにて」

*1・みちのくの一の関より四里入りし礫に日暮れ螢火をみる

【初出】 本歌集

〈通釈〉東北地方を旅していたとき、岩手一関から四里（約一五・六キロメートル）入ったところのあぜ道で、日暮れに螢の光を見た。

〈山田〉一関からどの方角に四里なのかは書かれていないが、旅程のコースから考えると北の方向ではないかと思われる。「四里」の読みは「より」「しり」どちらか不明だが、直前の「より」との押韻を狙っているのだろう。「礫に日暮れ螢火を見る」という助詞を省略した表現が、日暮れの中の螢火という灯りのはかなさをイメージさせる。

〈田中〉佐佐木信綱の代表作「ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲」（初出＝明治四十五年）と同じく、まず鳥瞰してから徐々に焦点を絞り、小さくはかなげな「螢火」へと視野を狭めていく手法である。

巻頭歌が歌集初出の新作であることの意義はなにか。「一の関」は、芭蕉「おくのほそ道」での最北の宿泊地。そこから南西方向に向かったと伝えられており、利玄もまた、南西方向にある峨々温泉に向かう設定になっている。利玄版『おくの細道』が、ここに始まっている。

* 2・賊住みし窟^{ほら}に近きみちのくの水田の畔に燃ゆるほたる火

【初出】 本歌集

〈通釈〉東北地方の旅の途上、山賊の住んでいたという洞窟に近い水田のあぜ道で燃える螢火を見た。

〈山田〉あぜ道の中の螢火というモチーフが前の歌から繰り返される。峨々温泉での作と伝えられる。東北に対する奇怪で土俗的なイメージが表現されている。

〈田中〉菱川(1973)によると、宮城県柴田郡川崎町にある「蓑々(峨々)温泉」での作という。妻照子(明治四十四年結婚)を連れての旅であった。群馬の四方温泉、九州の湯平温泉とともに、古くから日本三大胃腸病の名湯と知られている。「飲泉」のできる湯治場であるが、かなり奥深い地であり、原初的な恐れが「賊」という語にも象徴されている。

3・みちのくの石原道に日は暮れて揺るる俤に螢とびくる

【初出】 本歌集

〈通釈〉東北の石原の道で日は暮れていて、揺れる人力車に螢が飛んでくる。

〈山田〉東北を人力車で移動している時に螢が飛んできた様子を詠んだ歌。「石原」は宮城県大郷町にそういう地名があるようだが、地名ではなく単に石の多い野原道のことかもしれない。「みちのくの螢」を詠んだ歌が三連続で登場することになり、利玄の東北旅行のなかでも螢がきわめて印象的なものであったことがしのばれる。

〈田中〉この旅のことを回想した散文「自然に圧迫されて」(『定本木下利玄全集 散文篇』臨川書店、一九七七年以下、『定本』と略す)に、「大正二年の夏、仙台の手前大河原から七里山奥の、青根温泉に行つてゐた時、それから又何里か奥の、蓑々温泉へ、宿で知り合ひになつた三人の青年と行つた事がある」とある。山奥の、より奥へと進む心細さが、「揺るる」に重ね合わされてもいるのだろう。

4・たそがれのあかるさも消え肌さむみ心つつしみ俤にゆらる

【初出】 本歌集

〈通釈〉黄昏時の明るさも消えて肌寒いので、心を警戒させながら人力車に揺られる。

〈山田〉「さむみ」は「寒いので」。「つつしむ」は「用心して」の意と解釈。日が落ちて暗くなったので用心をしようという歌。内容はそれだけだが、「たそがれのあかるさ」という明るいア段の連なりから「消え」で転調し「さむみ」「つつしみ」と脚韻を踏んで寒々しさを演出するなど、音韻的には凝っている。

〈田中〉3と同じく「俤」が歌われている。当時、木下利玄は人力車で移動することが多く、日記等でもそれらが確認できる（日記では「腕車」の表記も多い）。

5・長雨がやみてみたればしみじみと秋はわれらに交りあ^{まじは}たり

【初出】 本歌集

〈通釈〉長雨が止んで眺めてみたならば、しみじみと秋はわれらに交わっている。

〈山田〉「みたれば」は「見たれば」と解釈。ア段とイ段の音をうまく響かせあつて、物寂しさを開放的な雰囲気をもたせている。「交る」は一体化するというような意味合いにとりたい。

〈田中〉「自然に圧迫されて」（前出）に、「戔々温泉へ、宿で知り合ひになつた三人の青年と行つた」と記述されているので、この「われら」はその青年たちを指し、かつ、「われら」人間たちと、大きい枠組みでとらえてもいるのだろう。

6・今われは何よりもこの山上の楓の肌にしたしめるなり

【初出】「心の花」十七卷十一号（大正二年十一月） 曙会記事

・今我は何よりもこの山上の楓の膚にしたしめるなり

〈通釈〉今私は、どんなものよりもこの山上の楓の幹肌にしたしみを覚えているのである。

〈山田〉目の前にある山上の楓の肌という、非常に微細でたった一つしかないもの。それだけにひたすら没入し、どんなものよりも親しみを覚えると述べている。その一極集中の精神に不思議なインパクトがある。結句の「なり」は断定であるが、同時に余韻も含む。

〈田中〉大正二（一九一三）年十月十二日に、竹柏園で開催された「曙会」での詠草である。題は「今」「横」「持」で、利玄が幹事であった。この歌に対し、佐佐木信綱は「一種の心持をよく表したものの。『なり』についての話もあつたが、此場合此の説明的のてにをはびつたり利いて居る」と評している。なお、この曙会では20の歌も披露していた。

*7・山深み草木しげる草木がわれにせまり来われにせまり来

【初出】「白樺」四卷十一号（大正二年十一月）「うす黄の菊」 異同なし（ただし「旅の歌」という後注あり）

〈通釈〉山が深いので、草木が茂っている。草木が私に迫ってくる、迫ってくる。

〈山田〉峨々温泉での作か。リフレインによって迫ってくる自然への恐怖を描き出している。都会人の利玄は、東北の素朴な自然のなかに潜む威圧感をひしひしと感じていた。

〈田中〉「自然に圧迫されて」（前出）に、「何だか人間界を離れたやうな気がして」とあり、その異界のような感覚が迫ってくるさまがうかがえる。

8・障子あくる音かららかにすみたれば椽の日ざしに心よるかも

【初出】 本歌集

〈通釈〉障子を開ける音がかるやかに澄んでいるので、椽に差す日差しに心がひかれていくものだ。

〈山田〉「かららか」は「軽らか」で「かるやか」の意。椽は「てん」または「たるき」と読み、屋根板を支える長い木材のこと。ここでは「てん」と読んだが「たるき」と読ませる可能性も十分にある。障子を開ける音という聴覚から日差しという視覚へ、そして心情表現へとそれこそ軽やかに移行していく。

〈田中〉「椽」の語は、84首目「馬返し蔦屋の椽に暮れてよりやすみし時のひもじき氣持」でも使われている。

9・こまやかに夕べの冷えが身にそひて初秋の山にさしぐみにけり

【初出】 本歌集

〈通釈〉密度濃く夕方の冷えが身にしみてきて、初秋の山で涙ぐんだ。

〈山田〉「こまやかに」は「濃やかに」で微細に、密度濃く、の意だろう。「さしぐむ」は「涙ぐむ」。体を感じる冷えを「身にそひて」と身体性豊かに表現するところに巧みさがある。「初秋の山に」の「に」は場所を指示する助詞ととつた。山の冷えがこちらまで伝わってくるような表現である。

〈田中〉結句「さしぐみにけり」からは、カアル・ブッセの「山のあなたの空遠く／「幸」住むと人のいふ。／噫、われひとゝ尋めゆきて、／涙さしぐみ、かへりきぬ」（上田敏・訳『海潮音』明治三十八年）も連想される。

*10・夜がくれば「御晩になりした」と云ふ挨拶をとりかはしつつ灯をともしたり

【初出】 本歌集

〈通釈〉夜が来ると「御晩になりした」という挨拶を取り交わしながら灯りをともしるのである。

〈山田〉「御晩になりした」という口語の挨拶をそのまま取り入れていることが特徴であり、人間の温かみを表現している。また、定型短歌における口語表現の一つの取組みであるともいえる。

〈田中〉夜遅くになりました、という意味の「御晩になりした」は、転じて「こんばんは」の挨拶。東北・北海道で使われることの多い丁寧な表現である。

11・山里のかたまりあへる四五軒が道さしはさみ夜の灯^よともせり^ひ

【初出】 本歌集

〈通釈〉山里のなかで固まり合うように建っている四五軒の家が、道を差し挟んで夜の灯りをともしている。

〈山田〉山里の小さな集落に灯りがともつていく光景を詠んだ歌。「四五軒」というように家の数がいまいなので、わりと遠くから風景を眺めていて暗さでよくは見通せない状況なのではないかと思う。「道さしはさみ」というように、集落が完全に寄り添っているわけではないことを表現しているところが上手い。

〈田中〉「自然に圧迫されて」（前出）に、「銭々温泉には」一軒の宿屋がある許りであつた「人も余り居ない」とある。旅人であるわが身と「道さしはさみ」地元の生活者がいることに目を向けたのだろう。

* 12・なじみつる温泉（註）の村をすてまた知らぬ山めぐる里の夕ぐれに入る

【初出】「白樺」四卷十一号（大正二年十一月）「うす黄の菊」

・なじみつる温泉（註）の村をすて又知らぬ山めぐる里の夕ぐれに入る

〈通釈〉親しんだ温泉宿のある村を去り、また未知の山を取り囲む里へと夕暮れのなか入っていく。

〈山田〉「温泉」で「ゆ」と読ませるのは利玄の特徴。旅を繰り返していた利玄の孤独な心情があらわれている。

〈田中〉散文「飯坂温泉」（『定本』所収）の、「青根温泉に、一ヶ月程居た帰りに寄った、福島県飯坂温泉は非常に気に入った」はこの歌と関係があるのだろう。「飯坂へ来て、湯の村温泉の、河に添うた美しい灯を見た時は、実にうれしくてたまらなかつた」とあるが、歌にするには「夕ぐれ」の寂寥感を演出している。

13・東京を遠く南に感じつ、白石町をとぼとぼあるく

【初出】「白樺」四卷十一号（大正二年十一月）「うす黄の菊」 異同なし

〈通釈〉東京を遠い南のように感じながら、白石町をとぼとぼ歩いている。

〈山田〉白石町は蔵王連峰の麓にある宮城県の白石。東京を遠い南のように思えるのは、蔵王の高い山々がそびえていることによる心理作用があるのだろう。「東京」を自らのホームタウンとしつかり捉えていることがこの歌から読み取れる。

〈田中〉12で解説した飯坂温泉にたどりつく前、暴風雨後で、「馬で白石の停車場迄、困難して出た」（「飯坂温泉」という記述がある。「とぼとぼあるく」には、その記憶も加味されているのだろう。白石町は城下町であり、掘割や水路があり、商家の蔵もある街並みである。徐々に南下し、東京に近付いている道中であるが、みちのくが、「東京」という中心を設定するために布置された周縁であることも示唆している。

「濁り川」

*14・桐の花雨ふる中を遠く来し常陸の国の停車場に咲く

【初出】「白樺」四巻七号（大正二年七月）「こゝろね」 異同なし

〈通釈〉雨の降るなかをはるばるやって来た常陸の国（現在の茨城県）の停車場に、桐の花が咲いている。

〈山田〉東北旅行からの帰りの一幕であると思われる。桐は東北地方で多く栽培されており、利玄との別れを東北の地が惜しんでいるという風に見て雨の中を咲く桐の花を描いたのだろう。また北原白秋の『桐の花』が、この歌が「白樺」に掲載される半年前である大正二年の一月に刊行されており、その影響もあるのかもしれない。

〈田中〉「桐の花」は夏の季語。北原白秋の歌集『桐の花』の影響もおそらくあるだろうが、白秋自身は利玄の『銀』を手にしたことはなかった事実を、「日光」利玄追悼号で明かしている。「歌集の『銀』は見る機会が無くて過ぎたが、最近の『一路』は寄贈を受けたばかりであった」（北原白秋「利玄の歌」「日光」二巻三号、大正十四年四月）。

下の句の「停車場」は、石川啄木「ふるさとの訛なつかし／停車場の人ごみの中に／それを聴きにゆく」（初出＝明治四十三年）に代表されるように、「近代の停車場は、出郷・帰郷に際しての別離や旅愁を象徴する場所」（「停車場」『石川啄木事典』おうふう、二〇〇一年）でもある。

15・あづまぢのみちのはてなる祝町のくるわを雨にぬれてゆきすぐ

【初出】「白樺」四巻七号（大正二年七月）「こゝろね」 異同なし

〈通釈〉東国地方の道の果てにある祝町の遊郭を、雨に濡れながら行き過ぎていく。

〈山田〉「あづまぢ」は「東路」で東海道・東山道のことだが、単に東国地方一般も指す。祝町は水戸市に近い大洗の地名のようであり、利玄が目白中学の教師をしていた頃に遠足の引率で訪れた地域である。「祝町」というめでたい名前

の町を濡れながらただ過ぎていき、その祝福を自ら遠ざかっていくという状況にややシニカルなものを感じる。

〈田中〉歌の背景について、紅野（1981「草稿」）に、「大正二年五月十六日、十七日の、水戸方面の遠足（当時利玄は目白中学の教師をしていた）に、生徒を引率してつれていった際の歌」「利玄日記のなかには『漁師町をぬけて水田の間の街道を水戸へ向った』（略）生徒とともにいうふうにしないで、あくまで一人旅の如く歌を作っているところに興味がいつそう募る」という解説がある。

＊16・板の間のくらきに昼の遊女ゐしを見つ、我が身は行きすぎしなり

【初出】「白樺」四巻七号（大正二年七月）「こゝろね」 異同なし

〈通釈〉昼間、暗い板敷の上に遊女がいた。それを見ながら自分は通り過ぎた。

〈山田〉「昼の遊女」は「昼のあいだの仕事に入っていないときの遊女」の意。「板の間のくらき」と合わせて、華やかな遊女が普段見せない陰の部分想起させる。そして遊女の姿を見ながら特に何もせず通り過ぎるばかりの自分を客観的に描き出すことで、その影の部分に深く立ち入ろうとしない自身の姿を強調している。

〈田中〉大洗観光協会のホームページ（<http://www.oarai-info.jp/rekisi/isobushi.htm>）によると、大洗町の祝町には「明治初期にはこの地に遊郭が多数あり」、水戸の芸者たちは、那珂湊の漁業にたずさわる人々から「磯節」という民謡を教わり、座敷歌として歌っていたという。

17・雨後の昼を水戸市に入ればひとくくと水にぎりみてる路傍の小川

【初出】「白樺」四巻七号（大正二年七月）「こゝろね」

・雨後の昼を水戸市に入ればなつかしや水にぎりみてる路傍の小川

〈通釈〉雨上がりの昼に水戸市に入ると、道端の小川はひたひたと水が濁りながら満ちている。

〈山田〉「雨後」という固い言い方が歌を引き締めている。「水戸」ではなく「水戸市」と呼ぶことで土俗的な地名ではなく社会的な自治体名であることを強調している。濁ったまま満ちる小川は「水戸市」の雰囲気そのものだろう。人ならざるものを排除して合理的な自治体として成立している「水戸市」の雰囲気^{うづき}に濁りを感じている。

〈田中〉明治二十二(一八八九)年に、市制施行により「水戸市」となった。日本で最初の三十一市の中の一つである。

* 18・棹にほす子供の着物うつりたる雨後の場末のうす濁り川

【初出】「白樺」四巻七号(大正二年七月)「こゝろね」

・ 棹にほす子供の着物うつりたる雨後の場末のうす濁り川

〈通釈〉棹にほしてある子供の着物を、雨上がりの場末の薄く濁った川の水面が映し出している。

〈山田〉利玄が第一子利公を喪ったあとの歌であり、他人の子の着物を見ながら我が子をかなしむ気持ち^{うづき}があらわれている。「雨後の場末のうす濁り川」という徹底的によどんだ風景の描写が、心の奥に沈殿するかなしみの象徴となっている。

〈田中〉前章「みちのくにて」では、みちのくから東京を見据え、ここでも、「場末」＝町はずれから東京のわが身を見据える視線がある。「濁り川」には樋口一葉「にぎりえ」の語感もあるのだろうか。

19・公園の梅林の青葉がくれの青き実のその昼われにしたしみしなり

【初出】「白樺」四巻七号(大正二年七月)「こゝろね」 異同なし

〈通釈〉公園の梅林の青葉に隠れている青い実が、その昼は私にとってしたしみを覚えたものだった。

〈山田〉「の」の繰り返しでズームアップする手法を用いている。「公園の梅林の」という初句十音の大胆な字余りが特徴的。「公園」は利玄の時代では最先端の都市設備だったはずなので、近代のなかに梅の実という古来の日本につながるものがふと隠れていたことに気付いてしたしみを覚えたのだろう。青のイメージを重ねているのも印象的。

〈田中〉明治六（一八七〇）年に「公園設置に関する太政官布告」が出され、東京府に五つの公園が誕生した。明治三十六（一九〇三）年に日比谷公園が開園。北原白秋も「公園の薄暮」という詩を明治四十二（一九〇九）年三月の「スバル」に発表している。ただしここでの「公園」は、梅の名所で知られる水戸の偕楽園（天保十三年＝一八四二年開園）と思われる。

20・いまして我が身のありし丘をよそに汽車は汽車とて走せすぎにけり

【初出】「白樺」四巻七号（大正二年七月）「こゝろね」

・いまして我が身のありし丘をよそにつれなく汽車は走せすぎにけり

のち、「心の花」十七巻十一号（大正二年十一月） 曙会記事

・今し方我身の在りし丘をよそにつれなく汽車は走せ過ぎにけり

〈通釈〉さっきまで我が身を置いていた丘をよそに、汽車は汽車としてその身を走らせて過ぎていった。

〈山田〉「走す」は「わしす」で、「走らせる」の意の古風な表現。汽車を擬人化して、どんどんと自分の身を走らせていくさまを捉えている。汽車は当時の最新テクノロジーであり、近代の象徴とみることもできる。

〈田中〉6と同じ歌会に提出した歌である。日本で初めて鉄道が開通したのは明治五（一八七二）年。「汽車」はその頃の蒸気機関車を指すが、ここでは列車と同意なのだろう。初出から改作を試み、「汽車は汽車とて」という畳語の表現となった。

「昼間」

* 21・牡丹園のすだれをもれて一ところ入日^{いりひ}があたり牡丹黙せり

【初出】「白樺」四卷七号（大正二年七月）「こゝろね」

・牡丹園^{ぼたんえん}のすだれをもれて一ところ入陽^{いりひ}があたり牡丹黙^{もだ}せり

〈通釈〉牡丹園にかかつているすだれの一カ所に夕陽^{ゆふがは}があたり光の漏れているなかを、牡丹は黙って咲いている。

〈山田〉牡丹の花が持つ艶やかなイメージにくわえて、それが沈黙するという表現が憂愁をよく伝えている。のちの作品「牡丹花は咲き定まりて静かなり花の占めたる位置^{あち}のたしかさ」（『一路』）とあわせてみると、利玄は牡丹に対して一カ所に留まって物を言わず耐え忍ぶ花というイメージを抱いているようだ。

〈田中〉「牡丹」は夏の季語。この歌の背景としては、大正二年五月四日の日記に、「牡丹は盛で豊艶で此上なく綺麗だった。それでゐて船で亀井戸^{カメイロ}へ廻った」と、牡丹を見物に行った記述がある（紅野（1981「草稿」）。また、古くは、明治三十七（一九〇四）年二月二十一日の日記に、「暖き朝なり庭を歩めり霜見えず牡丹の芽や、大きくなりぬ」と、牡丹に注目した記述があった（紅野敏郎「日露戦争と木下利玄」（上）「短歌」一九八二年三月号）。

* 22・わが瞳華美^{はで}にび、しくとらへつ、おし黙^{だま}りある 胴慾^{だうよく}な牡丹

【初出】「白樺」四卷七号（大正二年七月）「こゝろね」

・わが瞳華美^{ひとみはで}にび、しくとらへつ、おし黙^{だま}りある 胴慾^{だうよく}な牡丹

〈通釈〉わたしの瞳には華美（派手）で美しい姿に映っているが、欲の深い牡丹はひたすらおし黙っている。

〈山田〉「びゝしく」は「美々しく」。きらびやかなように見える牡丹であるが、ひたすらおし黙っている欲の深い花なのだと表現している。牡丹を沈黙の花ととらえる見方が連続しており、また女性的な存在として擬人化している。

〈田中〉「胴慾」は「無慈悲な」「情けをしらない」などの意味で、近松門左衛門の戯曲に用例がある。初出「こゝろね」二十三首のうち、21・24は巻頭の四首で、歌順の変更もない。

23・本所錦糸堀のたまり水に日暮れ闇はひ風のさむしも

【初出】「白樺」四巻七号（大正二年七月）「こゝろね」

・本所錦糸堀のたまり水に日暮れ闇はひ風のさむしも

〈通釈〉本所錦糸堀の水たまりの沼に日は暮れ、闇が這い寄ってきて風は実に寒い。

〈山田〉本所錦糸堀は「ほんじょきんしほり」で、上句は大胆な字足らずとなっている。本所錦糸堀は怪談「おいてけ堀」のモデルとして知られており、「闇はひ」などの表現から妖怪・怪異的なムードの立ち込める歌である。東京のなかにも土俗と連なる「闇」を見出しており、その不安感が字足らずの韻律と呼応している。

〈田中〉21でふれた大正二年五月四日の日記に、牡丹を見た帰り、「江東橋迄俤にのつた。錦糸堀辺の水たまりの沼と工場の中の白い道を寒い夕方に俤で通つたのは一種の情緒があつた」とあり、「たまり水」が「沼」となっていたことがわかる。なお、利玄は東大在学中から小泉八雲に関心を抱いていたという（『定本』、五島茂の解説）。

* 24・黒い工場とたまり水の間にたそがれの白き道あり人力走りす、む

【初出】「白樺」四巻七号（大正二年七月）「こゝろね」

・黒い工場とたまり水の間にたそがれの白き道あり人力走りす、む

〈通釈〉黒い工場と溜まっている水のあいだに夕暮れ時の白い道があり、そこを人力車が走って進んでいく。

〈山田〉「工場」は「こうば」と読む。初句と結句が字余りとなっている。「たまり水」は23にも登場する、本所錦糸堀

の沼と同じ。黒い工場と白い道との対比があり、人力車に乗りながらそのコントラストを捉えてみせた歌。結句の字余りに人力車が走るリズムが重ねられている。

〈田中〉23の解説の通り、「沼と工場の中の白い道を寒い夕方に俾て通った」折に感じた「一種の情緒」の歌である。明治近代を象徴する「工場」と、「闇」をかかえた沼との間の「白き道」。人力車に揺られながら、その対比などを考えていたのだろう。それが極端な破調を生み出したのだろうか。「黒き」ではなく「黒い」と、口語調も取り入れられている。

25・生きもの、身うちの力そ、のかし青葉の五月の太陽が照る

【初出】「白樺」四巻七号（大正二年七月）「こゝろね」 異同なし

〈通釈〉生き物の体内の力をせきたてながら、青葉しげる五月の太陽が照る。

〈山田〉「そ、のかし」は「勧める・せきたてる」の意で、「悪事をそそのかす」といったようなネガティブな意味合いをもたない上代の用法を採用していると思われる。いかにも白樺的な、ストレートな「生の力」礼賛の歌。

〈田中〉初出では20の次にこの歌で、その次は32の歌である。

26・甲羅虫草の葉ずるにつるみたり野原の露は昼ぬるみつ、

【初出】本歌集

〈通釈〉甲虫が草の葉の先で交尾をしている。野原の露が昼のなかでぬるまっっていく。

〈山田〉甲羅虫は、日本国語大辞典によるとカブトムシとコガネムシが地方によつてはこう呼ばれるらしい。草の葉の先に乗れるくらいの大きさのわけだから、コガネムシのほうではないかと思う。「交尾をする虫」と「ぬるまっっていく露」

のイメージの二物衝突が図られており、全体として真昼の野原の倦怠感を強調する仕組みとなっている。

〈田中〉交尾をする虫を歌材とし、前後の歌と併せて、生命世界への頌歌となっている。

＊27・核^{たね}かづき黒土いづるこの芽生^{アヤ}へまことにこれは力持てるよ

【初出】「白樺」四巻七号（大正二年七月）「こゝろね」 異同なし

〈通釈〉核をかぶったまま黒土から生えてきたこの芽は、これは本当に力を持っていることよ。

〈山田〉「かづき」は「被く」の連用形。小さいながら強い力を持った生命力への素朴な感嘆。生命力への賛美は「白樺」派の特色である。

〈田中〉初出では、28ゝ30・「朝の木戸空気がほのに桐の花の香をもちわが身立ちもとほるも」（未収録）・31・そしてこの27という歌順であった。「生^はゆ」はヤ行下二段活用の動詞なので、「生え」の表記が正しい。

＊28・緑葉の陰に嬰兒^{えいじ}の足の指ならべみ山すゞ蘭花もちにけり

【初出】「白樺」四巻七号（大正二年七月）「こゝろね」

・緑葉の陰^{かげ}に嬰兒^{えいじ}の足の指ならべみ山すゞ蘭花もちにけり

〈通釈〉緑色の葉の陰に赤ん坊の足の指が並んでいて、深山鈴蘭の花が咲いているようである。

〈山田〉「緑葉の陰に／嬰兒の足の／指ならべ／み山すゞ蘭／花もちにけり」という初句字余りのかたちと読んだ。「み山」は「深山」、「すゞ蘭」は「鈴蘭」。「緑葉」と「みどりこ」で色のイメージをかけたのちに、赤ん坊の白く小さな足の指を鈴蘭の花に見立てた隠喩の歌。子供に対する優しい視点は子を亡くした経験にもとづくものであり、あたたかながら悲痛さもある。

〈田中〉時代は下るが、北原白秋に「本草のさびしき相のその中にことに寂しきは深山鈴蘭」(『雀の卵』大正十年)と「深山鈴蘭」を歌ったものがあり、島木赤彦は「山の上に心伸々し子ら二人鈴蘭の花を掘りて遊べる」(『太虚集』大正十三年)と、子どもと鈴蘭とを取り合わせている。

29・ほのく^くとわがこ、ろねのかなしみに咲きつづきたる白き野いばら

【初出】「白樺」四巻七号(大正二年七月)「こ、ろね」

・ほのく^くとわがこ、ろねのかなしみに咲きつづきたる白き野いばら

〈通釈〉私の心の奥の悲しみに、ほのぼのと咲き続ける白い野いばら。

〈山田〉利玄には珍しい、象徴的イメージのみで構成された歌。純白だがとげを持つ野いばらの花は、利玄の心の繊細さをよくあらわしている。

〈田中〉「野薔薇^{のいばら}の花」は夏の季語。『銀』にはもう一首、白い野いばらを歌ったものがある(210首目「草堤の芽が根もとに野いばらの白く泣き居る夏の停車場」)。

30・タがたの雨あた、かく野いばらにぬれそ、ぐなりなつかしいかも

【初出】「白樺」四巻七号(大正二年七月)「こ、ろね」 異同なし

〈通釈〉夕方の雨はあたたかく野いばらを濡らしながら注ぐように降っていて、懐かしい気持ちになる。

〈山田〉こちらは実景の野いばらを詠んでいるが、「こころねの野いばら」とも呼応している。あたたかい夕方の雨はある種の恩寵である。「なつかしきかも」ではなく「なつかしいかも」となっており、口語調に文語風の終助詞「かも」が付くという不思議な構成となっている。

〈田中〉『定本 歌集編』等でも「なつかしいかも」の表記のままである。当時の「白樺」を見ても、歴史的仮名遣いと口語表記との混交はかなり見られ、こだわりはなかったことがうかがえる。

31・目の前の日なたの地に来て砂あびる思へば雀も可愛き小鳥

【初出】「白樺」四巻七号（大正二年七月）「こゝろね」

・目の前の日なたの地ちに来て砂あびる思へば雀も可愛き小鳥

〈通釈〉目の前にある日なたの土に来て砂を浴びている。思えば雀も可愛い小鳥である。

〈山田〉上句で「砂あびる」の主体を明確にせず、下句で雀と種明かしするという構成になっている。あまりに身近すぎて気にしていなかったが、思えば雀もかわいい小鳥だったという感慨。「青い鳥」（「スバル」に金星草訳で、明治四十三年〱一九二〇年翻訳あり）を想起させる。

〈田中〉「思へば」を用いると散文ふうになるが、逆にその散文調を活かした歌となっている。

32・汽車道の赤土土手の白き花夏あかつらどてが身近みぢかにまたよりて来ぬ

【初出】「白樺」四巻七号（大正二年七月）「こゝろね」

・汽車道の赤土土手の白き花夏が又また来ぬ身近かに息し

〈通釈〉汽車道の赤土、土手の白い花、今年もまた夏が身近に寄つてきたのだ。

〈山田〉名詞を二つ並べたあとに「夏がまた近づいてきた」という感慨を詠んだ歌。初夏の清涼感に満ちあふれた、現代的な感覚の歌である。「赤土」と「白き花」の色彩的対比も含めた名詞の連続が読む者を高揚させる。

〈田中〉紅野（1981「草稿」）によると、草稿の原歌は「汽車道の赤土土手の白き花夏がまた来ぬ身近に息し」であつ

たという。刊行直前に32の下の句に手直しされたことがうかがえる。

＊33・窓ぎはのとある工女の二の腕の今日も今日とてふとれるすべなさ

【初出】「白樺」四巻五号（大正二年五月）「春の肌身」 異同なし

〈通釈〉窓際にいる名も知らぬ工女の二の腕が、今日もまた太っているというどうしようもなさよ。

〈山田〉「の」を重ねてズームアップしていく手法を取り入れている。工女という肉体労働に従事する女性の肉體性を身も蓋もなく表現しているところに新しさがある。

〈田中〉20の下の句に「汽車は汽車とて走せすぎにけり」とあったが、ここも「今日も今日とて」と、散文的な「とて」が使われている。

＊34・はづみある処女の肌のはねかへす物なくいたみ汗もつ昼間

【初出】「白樺」四巻七号（大正二年七月）「こゝろね」

・はづみある処女の肌のはねかへす物なくいたみ汗もつ昼間

〈通釈〉弾力感のある乙女の肌が、はねかえすものもないまま痛んで汗をかいている昼間である。

〈山田〉何かをぶつけても跳ね返してしまいそうなほど若々しさにあふれた弾力感のある肌なのに、実際は昼間の重労働に耐えて痛々しく汗をかいている。前述の工女の歌なのかもしれない。純粹なほどの少女礼賛、若さ賛美がある一方で、労働現場の痛々しさにも想像をめぐらせている。

〈田中〉初出「こゝろね」二十三首のうち、十一から十四首目が一まとまりとなっているが、歌集の歌順は55・34～36であり、55の歌だけが離れたところに置かれている。

35・をんなの春の肌身の汗ばみをむし暑くつゝむ着物のおもみ

【初出】「白樺」四卷七号（大正二年七月）「こゝろね」 異同なし

〈通釈〉春の季節、女の汗ばんだ肌をむし暑くつゝむ着物の重みよ。

〈山田〉「をんなの」という字足らずの初句が一首全体のけだるいムードをかたちづくっている。汗ばんだ肌を想像しながら実際にあるのは着物の「重み」という触覚である点が官能性を際立たせている。おそらくは脱いだあとの着物なのだろう。

〈田中〉「春の肌身」という言葉は、二カ月前の「白樺」四卷五号（大正二年五月）収録、「春の肌身」二十四首詠のタイトルから来たものと思われる。

* 36・淫^{なま}れ女が着ものしんなり湯上りのからだにつくる昼のこゝろね

【初出】「白樺」四卷七号（大正二年七月）「こゝろね」 異同なし

〈通釈〉遊女の着物がしんなりとしていて、湯上りのからだに昼間の本心をつくっている。

〈山田〉利玄の官能美にあふれた歌。「淫れ女」は遊女のことだろう。「しんなり」というやわらかな擬態語を、動詞を添えずに用いて読者に想像の余地を与えるところが巧み。後半は少しわかりづらいが、脱ぎ捨てられてしんなりとしている着物を見て情欲を感じながらも、昼間に考えていた本心を思い出して湯上りの熱いからだに気持ち醒まそうとしている、という風に読んだ。

〈田中〉北原白秋『桐の花』（前出）に、「きりぎりすよき淫^{なま}れ女がひとり寝て氷食む日となりにけるかな」という歌もある。

* 37・見らるゝをひとひに感じうつむけるおぼこむすめのをんならしさよ

【初出】「白樺」四巻五号（大正二年五月）「春の肌身」

・見らるゝをひとひに感じうつむける内気娘の昼の肌かな

〈通釈〉見られている視線を額に感じてうつむいた若い娘の女らしいことよ。

〈山田〉視線に照れてうつむいてしまう若い娘の初々しさを賛美した歌。前述の「淫れ女」とは対照的な純粋で垢抜けしていない少女の姿は、島崎藤村の「初恋」を想起させる。

〈田中〉初出の下の句が改作され、ひらがな書きのやわらかさが際立っている。

38・いぢらしき忘れもかねつ泣き居たる浴衣の胸の乳のふくらみ

【初出】「白樺」三巻九号（大正元年九月）「夏の末」 異同なし

〈通釈〉いぢらしさを忘れることもできなかった。泣いているときの浴衣の胸の乳のふくらみを。

〈山田〉倒置法を用いている。37の歌の路線を引き継ぐような、垢抜けしていない少女像が浮かんでくる歌。ただし「胸の乳のふくらみ」の着目するなど、視線がかなりセクシャルなものへと変化している。

〈田中〉一連は大正二年作品であったが、これのみ前年の作品を配置しており、官能的な物語を志向した構成であったことがうかがえる。

「肌身」

* 39・西洋の絵紙にて幼馴染^{をきなじ}みなる空いろば^{そらいろば}なのみちばたに咲く

【初出】「白樺」四卷四号（大正二年四月）「空色花」^{そらいろばな}

・西洋の絵紙にて幼な馴染^{をきなじ}みなる空色花のみちばたに咲く

〈通釈〉西洋の絵紙にて幼い頃から馴染んでいた空色の花が道端に咲いている。

〈山田〉絵紙とは子供の遊びに使う絵の描かれた紙。「幼馴染」は現代語では人間に対してのみ使うが、当時は事物に対しても用いていた。子供の頃に絵紙で親しんできた空色の花が、今日の前の道端に咲いている。いっきに童心に還るような瞬間の思いが、「空いろばな」というひらがな混じりの表記にあらわれている。同時に、西洋の絵紙で遊んでいたという利玄の育ちのハイソさも際立つ。空色花という名の花はなく、利玄の造語と思われる。空色の花自体はワスレナグサやキュウリグサなど色々ある。

〈田中〉初出「空色花」^{そらいろばな}十首のうち、巻頭の二首が39と40である。「空色花」が何の花であるのかは示されていないが、

北原白秋『桐の花』（前出）に「仏蘭西のみやび少女がさしかざす勿忘草^{わすれなぐさ}の空いろの花」という歌もある。「勿忘草」は春の季語。

* 40・太陽はあたくかにあたくかに母らしき愛を送れり空色の花に^{そらいろ}

【初出】「白樺」四卷四号（大正二年四月）「空色花」^{そらいろばな}

・太陽はあたくかにあたくかに母らしき愛を送れり空色の花に

〈通釈〉太陽はあたくかくあたくかく母のような愛を送っていた。空色の花に。

〈山田〉白樺的生命賛歌のバリエーション。太陽、あたたか、母と縁語をつなげにつなげている。「空色の花」と表現

する事で、空そのものがひとつの花であるかのようなスケールの大きさを思わせる。「空色」に振り仮名があるが、現代では当たり前の表現も当時は意外と斬新なものだったのかもしれない。

〈田中〉菱川(1973)の注に、利玄は満四歳で実母から離されて上京し、六歳のときに実母が故郷で没したことから、「母性的なものへの憧憬が強く育っていった」(四七二頁)とある。この歌はまさに、あたたかな「母らしき愛」への憧憬であろう。

＊41・我が顔を雨後の地面に近づけてほしいまゝにはこべを愛す

【初出】「白樺」四卷五号(大正二年五月)「春の肌身」

・我が顔を雨後の地面に近づけてほしいまゝにはこべを愛す

〈通釈〉自分の顔を雨上がりの地面に近づけて、思い通りにはこべを愛する。

〈山田〉「ほしいまゝに」の字足らずが特徴。草体の低いこべをまじまじと見るには人間のほうが態勢を低くしてはならない。人間の側から自然に寄り添っていかうとする意識があらわれている。

〈田中〉川田順『木下利玄』(雄鶏社、一九五七年 以下、川田(1992)と略す)に、この歌の鑑賞文がある。「竹柏会で利玄はこの歌を出したが、千亦も恍もこれを賞めた。私も賛成したが、うかと口をすべらして『鶏のようだね』と冗談を言つたところ、さすがにおとなしい利玄も、その時はちよいといやな顔をした」(四七頁)。

42・子供の頃皿に黄を溶き藍をまぜしかのみどり色にもゆる芽のあり

【初出】「白樺」四卷五号(大正二年五月)「春の肌身」

・子供の頃皿に黄を溶き藍をまぜしかのみどり色にもゆる芽のあり

〈通釈〉子供の頃、絵皿に黄色の絵の具を溶いて藍色を混ぜてつくったあの緑色をして萌えている芽がある。

〈山田〉絵の具でつくった人工の色を自然の色と重ねている。幼い頃に人工物に先に触れ、のちにそれを再現する自然に出会うという構成は39と同一。都会育ちである利玄の生い立ちがあらわれている。また、このような構成の歌がともに幼い日のノスタルジアと結びついているのも興味深い点。

〈田中〉初出の「春の肌身」二十四首の前には、「此の歌の集りを有島生馬兄に献ぐ」という献辞が置かれている。明治三十七年十月一日の日記に、「白馬会展覧会」で有島生馬の油絵四点などを見たことが記述されており、絵画に関心を寄せていたことがわかる（日記の出典は、紅野敏郎「日露戦争と木下利玄（下）」「短歌」一九八二年五月号）。

なお、初出ではこの歌のあとに「春の日の庭の地面に風信草、ポインテリスの絵の具落せり」「箱の中の西洋菓子を楽しんで紅茶のみたしヒヤシンス花」の二首があつたが、歌集には収められていない。

* 43・年上の女の愛に身をつ、みあまゆるおもひ春の夜に触る

【初出】「白樺」四巻五号（大正二年五月）「春の肌身」

・年上の女の愛に身をつ、みあまゆるおもひ春の夜に触る

〈通釈〉年上の女性の愛に身を包んで甘える思いに、春の夜に触れる。

〈山田〉年譜を見る限りでは、利玄はトピックになるほどの年上の女性との恋愛の記録は残っていない。幼いとき生き別れになって再び会わぬままに亡くなった生母への憧憬もあるのかもしれない。

〈田中〉初出の歌順は、44・43・46・45であり、歌集では微妙に再構成されている。

44・春の夜のあまきうるほひこそばゆく指尖ゆびさきに来てくちづけをする

【初出】「白樺」四巻五号(大正二年五月)「春の肌身」

・春の夜のあまきうるほひしなやかに指尖ゆびさきに来てくちづけをする

〈通釈〉春の夜の甘い潤いがくすぐったく指尖ゆびさきに来てくちづけをする。

〈山田〉「指尖」に「あまきうるほひ」が来ると解釈。ロマンティズムにあふれる甘い歌であり、「春の肌身」の路線を引き継いでいる。

〈田中〉初出では三句目が「しなやかに」であり、やや常凡であった。「こそばゆく」と改作したことで、動きが生まれている。なお、「指尖ゆびさき」という言葉は、『銀』70首目「心行きて指尖ゆびさきとなりなで、ゐる女のまろくしろきた、むき」、224首目「風触れず指尖ゆびさき熱き繙帯を君苦にしつ、寝ねがてにする」、226首目「指尖ゆびさきに身うち熱のあつまりてうみ持つ傷の痛むあけ方」でも使われている。

45・この君のふところぬくきにほひよりわれつ、むらむこの母らしきは

【初出】「白樺」四巻五号(大正二年五月)「春の肌身」 異同なし

〈通釈〉君のふところのこの温かい匂いから、私を包んでいくのだろう。この母らしきは。

〈山田〉結句が八音となっている。「母らしき」という言葉が直截的にあらわれ、利玄の母性憧憬がはつきりと打ち出される。

〈田中〉特になし。

* 46・足ひろげ男ををどる彼の女こそよひのむねをいたがゆくすれ

【初出】「白樺」四卷五号（大正二年五月）「春の肌身」

・足ひろげ男ををどる彼の女^{ぢよ}こそよひのむねをいたがゆくする

〈通釈〉足を広げて男おどりを踊るあの女性こそが、今夜私の胸を痛痒くさせるのだ。

〈山田〉「こそ」「すれ」は係り結びであり、強調の意。「男ををどる」の意味を取りづらいが、男性的な激しさで「踊る」ととった。

〈田中〉阿波踊りなどでは、振りの所作の大きい「男踊り」と、編み笠を深くかぶった「女踊り」がある。だが、女性や少女が「男踊り」を踊ることもあり、ここでも若い女性が男踊りを踊っていたのだろう。

47・山王の桜しらみてタぐれのものかなさに我が身のひたる

【初出】「白樺」四卷五号（大正二年五月）「春の肌身」 異同なし

〈通釈〉山王の桜が白みを帯びてきて、夕暮れのはかなさに我が身は浸っている。

〈山田〉山王信仰に基づく神社にある神木の桜を「山王桜」といい全国各地にあるが、その後の「赤坂」の歌と絡めると現在の東京都大田区山王ではないかと思われる。「しらみて」ということは晝が咲いて色づき始めてきた初春の風景とすることになる。

〈田中〉初出でも47～50の順である。

* 48・茶屋女身をすてばちのあゆみぶりさくらしらみてひゆる夕方

【初出】「白樺」四卷五号（大正二年五月）「春の肌身」 異同なし

〈通釈〉茶屋女の、自分の身などどうとでもなれといった生き方。桜が白みを帯びてきて冷える夕方。

〈山田〉「茶屋女」は料理屋で遊興の相手をする女性。「工女」や「遊女」同様、利玄はアウトロー的な生き方を送る女性に妙な関心を寄せるところがあるようだ。前の歌同様に色づき始めの桜を詠んでおり、初春の風景である。

〈田中〉「茶屋女」という言葉は、『銀』217首目「茶屋女うちは持つ手の汗ばみの昼のけだるさきりくすなく」でも使われている。

49・赤坂の茶屋に三味なり灯がともし山王の桜はつめたくしらみぬ

【初出】「白樺」四卷五号（大正二年五月）「春の肌身」 異同なし

〈通釈〉赤坂の茶屋に三味線が鳴り、灯りがともし、山王の桜は冷たく白みを帯びた。

〈山田〉三味線の鳴るような座敷付きの赤坂の茶屋という、いかにもいなせな舞台設定がなされている。またこの歌で、「山王」が赤坂の山王日枝神社であることがわかる。夜を迎えてあたたかな灯りがともし人為的な華やかさを帯びてゆく茶屋と、冷たく白んでゆく初春の桜という自然物の対比がなされている。

〈田中〉赤坂の高台あたりは、官吏や有産階級の居住地。しかし、日露戦争のころは軍人が赤坂の待合茶屋を利用していたという。

50・人帰りさくらしらみてくる、なりわが身ひとつはいかにすべけむ

【初出】「白樺」四卷五号（大正二年五月）「春の肌身」

・人帰りさくらしらみてくるなりわが身ひとつはいかにすべけむ

〈通釈〉人が帰り、桜は白みを帯びてきて日は暮れていった。我が身ひとつはいったいどうすればよいのだろう。

〈山田〉華やかな宴が終わったあとの孤独感を表明している。「白む桜」というモチーフが四首連続であらわれ、寂しさを象徴する風景として相当にこだわっていることが見て取れる。

〈田中〉冒頭で述べたが、紅野（108）「草稿」により、歌集題候補が「わが身」であったことが明かされた。『銀』二九九首のうち、「わが身」の語が使われているのはこの一首のみである（20は「我が身」と漢字表記）。抽象的な歌ではあるが、本歌集の核となる歌として再読したい。

* 51・芽ぐむ木にめぐられて立つ木は何も云はねど何か何かそゝらる

【初出】「白樺」四巻五号（大正二年五月）「春の肌身」 異同なし

〈通釈〉芽をつけている木に囲まれて立つ木は、何も云わないけれど何か何か心を動かすものがある。

〈山田〉芽ぐむ木は未来への希望をその内にはらんでおり、それに囲まれている木はまだ芽をつけていないのだろう。上流階級に囲まれて育ちながら心の底にいつも孤独を抱えていた利玄自身と重ねている部分があるように思う。

〈田中〉初出では51～54・58の順であり、58のみが離れて置かれている。

52・高き木の新芽^{しんめ}見あぐるわが肌の汗ば^{なかしめ}みいとし夏の秋波

【初出】「白樺」四巻五号（大正二年五月）「春の肌身」

・高き木の新芽^{しんめ}見あぐるわが肌の汗ば^{なかしめ}みいとし夏の秋波

〈通釈〉高い木の新芽を見上げる自分の肌の汗ばみがかなしいくらいの、夏の女の涼しげな目元よ。

〈山田〉「秋波」は「流し目」で美しい女性の涼しい目元や媚びた仕草を意味する。「高き木の新芽」はうら若い高嶺の花的な女性のメタファーであり、その女性を前にして緊張で汗ばんでしまっているのだろう。「いとし」は自分自身に向

けて使っているの、「愛しい」ではなく、「かわいそうだ」「不憫だ」の意味の方ととった。

〈田中〉50で「わが身」、52で「わが肌」、53で「我が顔」、54で「我が素足」と、集中的に自身が歌われている。

* 53・我が顔に青き光を受けながら藪かげ草の肌身をのぞく

【初出】「白樺」四巻五号（大正二年五月）「春の肌身」 異同なし

〈通釈〉自分の顔に青い光を受けながら、藪かげで草の身をのぞく。

〈山田〉太陽光が葉に透けている光を「青き光」と形容している。藪かげの草という自然的イメージのなかに「肌身」という人間的な肉体を想起させる言葉を入れて歌に奥行きを与えている。

〈田中〉「藪かげ」への着目は、竹柏会で学んだ作歌技術からであろう。『銀』でも、287首目「うす雪は小雨にとけてうぐひすのさゝなきをきく藪かげの道」、293首目「藪かげのくろき朽葉のうづたかき流に落つる紅椿かな」など、初期作品に「藪かげ」の語が散見する。

54・足袋ぬげば春の皮膚と我が素足もつれあふこそわりなかりけれ

【初出】「白樺」四巻五号（大正二年五月）「春の肌身」

・足袋ぬげば春の皮膚と我が素足もつれあふこそわりなかりけれ

〈通釈〉足袋を脱いだら春の皮膚と私の素足がもつれあうのはなんとすばらしいことだ。

〈山田〉「こそ」「けれ」は強調の係り結び。「春の皮膚」は春の予感を表現した擬人化だろう。目に見えない「春の皮膚」と目に見える「我が素足」のもつれあうというイメージが鮮やか。「わりなし」は上代では「ひどい」「苦しい」というマイナスイメージだったのが中世では「すばらしい」というプラスイメージへと意味が変化する言葉。この歌では

「春」の希望にあふれた意味合いから、プラスイメージを採用した。

〈田中〉初出と歌集との異同において、多いのはルビの変更・追加である。ここでも、「素足」にルビが追加されている。

55・つ、ましく君は小さき手をあらふ好きなその手がおとなしく濡る

【初出】「白樺」四卷七号（大正二年七月）「こゝろね」

・つ、ましく君は小さき手^{ちひ}をあらふ好きなその手がおとなしく濡る

〈通釈〉 つつましげに君は小さな手を洗う。好きなその手が静かに濡れる。

〈山田〉 思いを寄せる少女が手を洗っているさまを見ている歌。「いとしき」ではなく「好きな」というややフランクな雰囲気が印象的。「おとなしく」は「大人っぽく」などの意もあるが、ここは「つつましげ」と響き合わせるために「静かに」「穏やかに」という現代語に近い意味とする。

〈田中〉「好きなその手」という直接的で口語的な言い回しに新味がある。

56・食卓の牡丹の花に見入りつ、四月二十日の昼とあひみる

【初出】「白樺」四卷五号（大正二年五月）「春の肌身」 異同なし

〈通釈〉 食卓の牡丹の花に見入りながら、四月二十日の昼と対面する。

〈山田〉 再び牡丹の花が出てくるが、ここでは食卓なので花瓶に入った牡丹だろう。四月二十日は二十四節氣のひとつ、穀雨であり、春の雨のイメージを背景に重ねているのかもしれない。「昼にあひみる」ではなく「昼とあひみる」なので、誰かと昼に会うのではなく四月二十日の昼そのものと向き合うという意味なのだろう。

〈田中〉明治三十年頃から、西洋式の「食卓」と「椅子」が寿司店などで取り入れられたという。歌の当時でも、「食卓」の語彙は一般家庭では比較的新しいものではないか。初出でも56・57の順であるが、56の前に「純白の食卓かけの上」にのり身ぶりもいきなシクラメンかも」(未収録)と、「食卓かけ」IIテーブルクロスという新しい文化も歌われていた。

57・そゞろなる浮気娘の襟あしの生へぎはにくむ、食卓の藤

【初出】「白樺」四巻五号(大正二年五月)「春の肌身」 異同なし

〈通釈〉わけもなく浮気がちな娘の襟足の生え際を憎む。食卓の藤を見ながら。

〈山田〉「浮気娘」は52の流し目を送る女性と重なる。浮気娘そのものを憎むのではなく、その襟足の生え際が美しいゆえに誰もが魅入られてしまうのだという本当は憎からず思っていることがうかがわれる表現となっている。読点を挟んだ「食卓の藤」は、食卓の花というモチーフが一つ前の牡丹の歌と共通。藤の形状は女性の髪型をイメージさせるところがある。

〈田中〉「藤」は万葉集以来歌われ続けており、「春」の季語。蔓や、花穂を垂れる姿から、女性への連想はたやすく、しなをつくっている様も図像的に浮かぶ。

58・思ひつめわがかなしみのほそるなり新芽^{しんめ}に靄^{しんめ}のひゆる夕方

【初出】「白樺」四巻五号(大正二年五月)「春の肌身」

・思ひつめわがかなしみのほそるなり新芽に靄のひゆる夕方

〈通釈〉思いつめて私のいとしきは弱くなつていく。新芽に靄がひかる夕方。

〈山田〉「かなしみ」は悲哀の意。「新芽」は52の、高嶺の花的女性のメタファーである「高き木の新芽」と同じもので

はないかと思う。親愛の情が弱まっていくことと、霽のかかる夕方に日が暮れていくことが重ねられている。

〈田中〉初出では51～54の直後の歌であったが、歌集の小題「肌身」の最後に置かれたことで、「わが身」歌の根底に「かなしみ」があることがうかがえる。

「旅の雪」

*59・旅に来てはじめての夜のさびしさに明くれば降れる山里の雪

【初出】「白樺」四卷二号（大正二年二月）「旅の雪」

・旅に来て初めての夜のさびしさに明くれば降れる山里の雪

〈通釈〉旅に出て最初の夜のさびしさよ。夜が明ければ降り積もっていた山里の雪。

〈山田〉旅行一日目の夜を終えたときの情景。「降れる」の「る」は完了の意と解釈。「に」が非常に重層的な助詞であるが、ここで一旦切れて余情を残した表現ととった。

〈田中〉初出では、59～62・64・65・63の順であるが、七首すべて収録されている。

60・朝の雪谷間の石につもれるを温泉のガラス戸によりそひて見る

【初出】「白樺」四卷二号（大正二年二月）「旅の雪」 異同なし

〈通釈〉朝の雪が谷間の石に積もっているのを、温泉のガラス戸に寄り添いながら見ている。

〈山田〉前の歌に引き続き、一夜明けたあとに降り積もった雪を眺めている情景。「温泉」と書いて「ゆ」と読ませる利玄独特の用法が登場する。「ガラス戸」にカタカナを用いているため、洋館風のモダンな温泉宿なのではないかというイメージが沸く。

〈田中〉のちのエッセイ「私の冬の歌」（「新家庭」大正十二年一月）で、この歌を挙げて、「（浴槽から出て）全くからだを装ってゐないで而も暖かい自分が、溪川の流れと、其巖の頭に雪の積つてゐる寒い冷たい荒い自然を、硝子戸一重を隔てて、つい近くに見る事を好ましく思つて、猶暫らく立つてゐた」とある。その前に「或年の暮、伊豆の或温泉場に出かけた」とあり、この「旅」一連は伊豆の温泉でのものと思われる。

61・納屋^{なや}の屋根の昼の雪どけ四十雀いくつも前の木の枝になく

【初出】「白樺」四卷二号（大正二年二月）「旅の雪」

・納屋の屋根の昼の雪どけ四十雀いくつも前の木の枝になく

〈通釈〉納屋の屋根の上の昼の雪どけ。その前の木の枝で四十雀が何度も鳴いている。

〈山田〉引き続き温泉宿の雪景色の風景だろう。昼になって空気がぬるみ、雪どけが始まっている。家の前の木の枝には早春を告げる鳥である四十雀が鳴いている。「いくつも」が「何度も」の意なのか「何羽も」の意なのか汲み取り辛いが、「何度も」の意と取った。

〈田中〉前の60が「朝」、これは「昼」の歌で、時間の推移と心の動きがわかりやすい。

62・向ふ岸の崖の日なたの南天の赤き実よ実よさなむづかりそ

【初出】「白樺」四卷二号（大正二年二月）「旅の雪」 異同なし

〈通釈〉向こう岸の崖の日なたに生っている南天の赤い実よ、実よ、そう不機嫌になるな。

〈山田〉南天の実の冬は冬の季語。「向ふ岸の崖の日なた」は遙か遠い場所のかすかな光というイメージだろうか。「なくそ」構文の使用や「実よ実よ」と二度呼びかけるところに、「春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕べ」（北原白秋『桐の花』）を連想させる。

〈田中〉特になし。

63・残る雪青白みつ、浮べるを日くれわびしくうちまもるかな

【初出】「白樺」四巻二号（大正二年二月）「旅の雪」 異同なし

〈通釈〉溶け残った雪が青白みながら浮かんでいるのを、暮れる日がわびしくただ見つめているのだ。

〈山田〉「日くれわびしく」は擬人法を用いているものと解釈。59の歌以降、朝から日暮れにいたるまでに雪の様子を時系列で追い続けている。

〈田中〉特になし。

* 64・磯町の床屋によりて髭剃れば鏡にうつり霞ふるなり

【初出】「白樺」四巻二号（大正二年二月）「旅の雪」

・磯町の床屋によりて髭剃れば鏡にうつり霞ふるなり

〈通釈〉磯町の床屋に寄って髭を剃ってもらっていると、鏡に映ったまま霞が降っている。

〈山田〉「磯町」は地名ではなく磯辺の町という意味。写生的な歌だが、鏡に写った霞という点から左右が反転した鮮やかな世界の照射となっており、そこがわびしさの残る田舎町の床屋の空気感とコントラストを生んでいる。

〈田中〉初出では「髭」||あごひげであったが、歌集では「髭」||くちひげに置き換えられている。残された利玄の写真を見ても、「髭」の字の方がふさわしい。

65・去りがてに蜜柑畑をさまよひぬひく、しげれる緑したしみ

【初出】「白樺」四卷二号（大正二年二月）「旅の雪」

・去りがてに蜜柑畑をさまよひぬ低くしげれる緑したしみ

〈通釈〉立ち去ることができずに蜜柑畑をさまよった。低く茂っている緑になじみながら。

〈山田〉「がてに」は「難てに」で「できずに」の意。蜜柑畑の緑の木々と一体感を覚え始めて立ち去りがたかったということだろうか。蜜柑には利玄の郷愁が込められているように思う。

〈田中〉白い雪、南天の赤い実と続き、ここでは黄色の「蜜柑」と「緑」。色彩あざやかで、連作としていきいきとした表情を見せている。

66・俤走り黄色の蜜柑後になり温泉の町さかる胸つぼらしさ

【初出】「白樺」四卷四号（大正二年四月）「空色花」

・俤走り黄色の蜜柑後になり温泉の町さかる胸つぼらしさ

〈通釈〉人力車が走り、黄色い蜜柑が後ろに去っていく、温泉町を離れていく胸が潰れるような思い。

〈山田〉温泉町を去っていくときの感慨。「黄色の蜜柑」は立ち去りがたかった蜜柑畑の蜜柑なのだろう。夢から離れ現実の世界へと舞い戻っていく決意が満ちている。「胸つぼらしさ」は、「胸潰らはし」と同じ語と解した。

〈田中〉胸づわらしは「胸つぼらわし」の変化したもので、「胸つぼらし」とも。歌集小題「旅の雪」八首のうち、この一首のみ初出が異なるが、違和感はない。

「糸くづ」

*67・や、疲れ膝くづしつ、窓による顔の上氣のぼせのにくき女よ

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・ 稍しやう疲れ膝くづしつ、窓による顔ののぼせのぼせのにくき女よ

〈通釈〉やや疲れて膝をくずしながら窓に寄る顔の、のぼせ加減が心憎い女だ。

〈山田〉初期利玄の特徴である官能的な歌。女性の動作の精緻な描写が印象的である。うとましさを感じつつも心惹かれる気持ちだが、「にくき」という語に託されている。

〈田中〉大正元年十月、栃木県日光へ行き、中禅寺湖畔に一泊したことを歌材としたもの。温泉を楽しんだあとの「上気」とすることもできるが、ここでは「女」の美しさを引き立たせる装置として解釈したほうが無難だろう。

68・のぼせたる頬くれないあの紅のにく、して君に奪とらる、我が心かな

【初出】「白樺」三卷十一号（大正元年十一月）「日光にて」

・ のぼせたる頬くれないあの紅のにく、して君に奪とらる、我が心かな

〈通釈〉のぼせた頬の紅色が心憎く、君に奪われていく我が心であるよ。

〈山田〉67に続く歌。「心が奪われていく」という様子がよりはつきりと言葉で表現されている。

〈田中〉この歌を含めた歌集小題「糸くづ」全二十一首は、初出が多岐に渡る。構成に工夫を凝らしたさまが思われる。

* 69・腕にからむ紅き縮緬つめたさと重さおもへば君のいとしや

【初出】「白樺」四巻四号（大正二年四月）「空色花」

・腕にからむ紅き縮緬つめたさと重さ思へば君のいとしや

〈通釈〉腕にからむ紅い縮緬の冷たさと重さを思えば君がいたいことだ。

〈山田〉この「紅き縮緬」は「君」が脱いだものののだろう。脱ぎ捨てた衣服を自分の腕に絡ませて、その冷たさとわずかな重さから「君」の存在を感じている。「不在」の感触からかつて確かに存在していた「實在」を思うという、利玄の官能歌によく見られるパターンである。

〈田中〉初出では39・40の次がこの69であり、続けて91・96・92の歌である。

* 70・心行きて指尖となりなで、ある女のまろくしろきた、むき

【初出】「白樺」四巻一号（大正二年一月）「粉雪（糸屑）」

・心行きて指尖となりなで、居る女の円くしろきた、むき

〈通釈〉心が指先へと集中して撫でている、女の円く白いいたむき。

〈山田〉「たゝむき」とは肘から手首にかけての腕の部分。全神経を指先へと集中させ、まるで心そのものが指先となつたかのように自己を客体化して表現している。官能美のなかに、利玄特有の醒めた知性が見え隠れする。

〈田中〉初出「粉雪」のうち、小題「糸屑」では全四首。うち、三首が収録されており、初出では、「今しがた茶の間の時計十うちぬ厨にあまねき秋の光線」（未収録）に続いて、71・72・70の順であった。

71・工女たち工場こうばの前の空地あきちにて日の目をみつ、遊ぶあはれさ

【初出】「白樺」四巻一号(大正二年一月)「粉雪(糸屑)」

・工女たち工場こうばの前の空地あきちにて日の目を見つ、遊ぶあはれさ

〈通釈〉工女たちが工場の前の空き地で、光の当たる場所を見ながら遊んでいるあわれさよ。

〈山田〉下層階級の女性に関心を寄せる利玄の性格があらわれた歌。「日の目」は現在使われるような「埋もれていた才能が発掘される」という意味合いではなく単に「日の当たる場所」の意だろうが、いつかもしれない希望をたよりに毎日を暮らしている工女の生活にかすかな同情心を持つていることを考えると、今日的な使い方の意味合いもわずかに含んでいるのかもしれない。

〈田中〉初出の時期から見ても、外気の冷えた冬場の作。その寒さを少しでもやわらげようと、「日の目」のあたる場所を選んで遊ぶ工女たちの生命力に心ひかれ、「あはれさ」という語をみちびいたのだろう。

*72・ブリツヂの赤き糸くづ人ふみてなほのこりゐる赤き糸くづ

【初出】「白樺」四巻一号(大正二年一月)「粉雪(糸屑)」

・ブリツヂの赤き糸くづ人ふみてなほ残り居る赤き糸くづ

〈通釈〉橋に落ちている赤い糸くづを人が踏み、それでもなお残っている赤い糸くづである。

〈山田〉たゞごと歌といえる歌であるが、橋をわざわざブリツヂと英語表記するなどハイカラな部分が見て取れる。ここで「赤き糸くづ」に向けている視点は71の「工女」に対して向けている視点と近いものがあるように思う。往来の人に踏みしだかれ橋の上に残された糸くづに、利玄は底辺にいる者の強さを見ている。

〈田中〉「工場」や「ブリツヂ」という近代の語彙のあとに、次からの村の祭礼という前近代ふうの歌を配置したところ

ろが興味深い。

73・村だけの心をつくし祭礼まつりする人たちの上に秋空くもる

【初出】「白樺」四卷十一号（大正二年十一月）「うす黄の菊」 異同なし

〈通釈〉村ならではの心を尽くして祭礼する人たちの上に秋空が曇っている。

〈山田〉貧しい村ではあるができる限りの礼を尽くして祭礼を行う。その村人たちの上に曇った秋空がある。厳しい冬の予感が内包されており、地方の貧村の痛ましい雰囲気を書写している。

〈田中〉初めに述べたが、紅野（108）「草稿」によると、草稿当初の歌集題は「うす黄の菊」であった。初出「うす黄の菊」全十一首の歌集での配列順を見ると、76・「菊が咲く十月もたけ流行の冬着新柄店に飾れる」（未収録）・73・74・75・89・85・「そのかみの少女大きくふとりつゝわが身近くに物云ひてゐる」（未収録）・7・12・13と、分散して収録されていることがわかる。

74・うきくと屋台の上に神樂せし人等いぢらし雨降りいでぬ

【初出】「白樺」四卷十一号（大正二年十一月）「うす黄の菊」 異同なし

〈通釈〉うきうきと楽しそうに屋台の上に神樂を出している人たちが健気である。雨が降り出してきた。

〈山田〉神樂は神に奉納するための歌舞。貧しいながらも盛大に祭りを盛り上げようとしている人たちの健気さが心にしみる。そこに、未来の不安を象徴するように雨が降り出してくる。利玄の四句切れの歌ということで、「街をゆき子供を導く時蜜柑の香せり冬がまた来る」（大正四年作）を連想させる。

〈田中〉初出から、大正二年十月ころの祭礼の実感であることがうかがえる。

75・さ、やかなる八兵衛稲荷の祭礼さいれいの二日目の今日も雨が降るなり

【初出】「白樺」四卷十一号（大正二年十一月）「うす黄の菊」

・さ、やかなる八兵衛稲荷の祭礼の二日目の今日も雨が降るなり

〈通釈〉ささやかな八兵衛稲荷の祭礼の二日目である今日も雨が降っている。

〈山田〉八兵衛稲荷は現在の新宿区若松町にある神社で、火事除けのご利益があるという。ただ事実を淡々と連ねただけの歌だが、火事除けの祭りに雨がさすということに利玄は皮肉を覚えているのかもしれない。

〈田中〉73では「祭礼まつり」のふりがながだが、ここでは初出にないルビ「祭礼さいれい」を添えて、五音の語調を整えている。

* 76・菊の中のうす黄の菊と咲き出づるこの草の上もよそにはおもはず

【初出】「白樺」四卷十一号（大正二年十一月）「うす黄の菊」 異同なし

〈通釈〉菊の中にもいろいろあつて、薄黄色の菊の花も、それが咲き出しているこの草の上も決して他人ごととは思えない。

〈山田〉八八の利玄調が登場している歌。菊の中では目立つものではない薄黄色の菊や、花以外の部分にも目を向けて共感を覚えている。マイナーなものに惹かれる利玄の性格があらわれている歌だろう。

〈田中〉利玄の菊の歌のなかでも初期の代表歌。歌集題候補に「うす黄の菊」があつたが、この秀歌をふまえてのことだったのだろう。「雑感七つ」（『定本』八一〜八五頁）の「二 自分の傾向」に、「人のつまらないと云ふ、見どころがないといふやうな処にも、随分好きなどころや、面白いと思ふ処があり、草木にしても、何の曲のない叢や雑木などに、飽きない愛着を覚える事がよくある」とある。他人が見過ごしがちな箇所こそ目を届かせていたことがうかがえる。

* 77・普請場に材木を置く遠びき病みて臥す日は悲しかりけり

【初出】「白樺」四卷一号（大正二年一月）「粉雪（病みて）」 異同なし

〈通釈〉工事現場に材木を置く音が遠く響いている。病気で臥せている日は悲しかったことだ。

〈山田〉病身の孤独が描かれた歌。なんでもない普請場の音が遠く響いてくるからこそ、病気のかなしみが深まってくる。

〈田中〉初出号の五か月前に、初めてのわが子利公を喪っている。その心の痛手も引きずり、「悲し」に重いひびきがあるのだろう。初出の「粉雪」のうち、「病みて」の小題は全八首。『銀』での収録順は、77〜84までで、すべて初出と同じ順である。

* 78・庭見れば土にしみ入りしみ入りて冷え／＼雨の降り出でしかな

【初出】「白樺」四卷一号（大正二年一月）「粉雪（病みて）」 異同なし

〈通釈〉庭を見ると土にしみ入ってしみ入って冷え冷えと雨が降り出していたよ。

〈山田〉大正元年十一月十三日に大野屋で開かれた曙会の提出作品とのこと。リフレインを二回も使用しており、氷雨が降り出した時間の倦怠感を表現しようとしている。

〈田中〉菱川（1973）によると、曙会での作品とのこと。正岡子規以来の仰臥歌の系譜のもの。仰臥の姿勢から「庭」の見るために視線が低く、雨が「土」にしみ入るさまを凝視するような表現となっている。

79・雨雲のひまより夕陽うすくさし今日も暮れ行く臥しつゝ居れば

【初出】「白樺」四卷一号（大正二年一月）「粉雪（病みて）」 異同なし

〈通釈〉雨雲のすきまから夕陽が薄く差していて、今日も暮れてゆく。臥せったまま過ごしていれば。

〈山田〉雲間からの夕陽を美しく表現した上句から、病身のはかなさを表現した下句へと接続する。正岡子規の病床詠と同じような感慨を表現しているが、対比として描写される景色の美しさにかけては利玄に特色がある。

〈田中〉特になし。

80・黒き虻白き八つ手の花に居て何かなせるを臥しつゝ、見やる

【初出】「白樺」四巻一号（大正二年一月）「粉雪（病みて）」 異同なし

〈通釈〉黒い虻が白いヤツデの花に降り立って何かしているのを、臥せながら見ている。

〈山田〉「見やる」は漠然と遠くを見るの意。黒い虻と白い花と対比、何をしているのかはわからないけれど小さな虻を視界に集中して徹底的に観察する視点など、動けないために視線が研ぎ澄まされていく病床詠の真髓の出ている一首。

〈田中〉「八つ手の花」は冬の季語。「何かなせるを」という茫洋とした表現が、逆に小さな生き物にも備わった生命力を引き立てている。

*81・遅くつきし湯元の宿のくらき灯にわれ等の食べし黒き羊羹（日光の旅を憶ふ四首）

【初出】「白樺」四巻一号（大正二年一月）「粉雪（病みて）」

・遅くつきし湯元の宿のくらき灯に吾等の食べし黒き羊羹（旅を想ひて歌へる四首）

〈通釈〉遅く到着した湯元の温泉宿の薄暗い灯りが、私たちの食べた黒い羊羹を照らしている。

〈山田〉日光湯元温泉での旅行詠。羊羹は食べさしのまま置かれて灯りに照らされているということだろうか。黒く四角い羊羹が、夜闇のなかに立つ宿と形状的に重ねられているのかもしれない。

〈田中〉羊羹は、地方によっては、おせち料理の菓子として冬に作られるものだった。初出の時期を見ても冬であり、

結句の体言止めで「黒い羊羹」が強調されているのは、その時季の菓子を口にしたことの感動でもあろう。

82・くらき灯にわれ等居群れて冷えし手を火鉢によせし湯元の宿屋

【初出】「白樺」四卷一号（大正二年一月）「粉雪（病みて）」

・くらき灯に吾等居群れて冷えし手を火鉢によせし湯元の宿屋のち、「心の花」十七卷八号（大正二年八月）曙会記事

・暗き灯に吾等群れて冷えし手を火鉢によせし湯元の宿屋（日光）

〈通釈〉薄暗い灯りに私たちが群がって手を火鉢へと寄せた。湯元の宿屋にいて。

〈山田〉81と同じく日光湯元の旅行詠。「黒き羊羹」に続き「火鉢」が登場し、薄暗い灯りと対比させられている。

〈田中〉温泉地とはいえ、室内の寒さは身に沁みるもの。その、しんと身に迫る「冷え」をあたためる「火鉢」の火の色があたたかい。大正二年七月十三日に竹柏園で開催された曙会は、題が「眠らむとして」「途上」「群」であった。「群」の題詠としてこの一首を投じたのだろう。

83・や、胸の悪き氣もちに仰向きし湖上の舟も今はなつかし

【初出】「白樺」四卷一号（大正二年一月）「粉雪（病みて）」

・や、胸の悪き氣持に仰向きし湖上の舟も今はなつかし

〈通釈〉湖上の舟の中で胸がやや具合の悪い気分となったことも今となつては懐かしい。

〈山田〉日光の湖というと中禅寺湖だろうか。湯治のための旅行であったこと、追憶の歌であることがここで強調される。

〈田中〉長男利公を喪った今、さまざまなのが「今はなつかし」と回想されるほどのより深い悲しみの内にいることが想像される。

84・馬返し蔦屋の椽に暮れてよりやすみし時のひもじき気持

【初出】「白樺」四巻一号(大正二年一月)「粉雪(病みて)」

・馬返し蔦屋の椽に暮れてより休みし時のひもじき気持

〈通釈〉日光馬返し蔦屋旅館の椽^{たるき}の見える部屋で、日が暮れてから休んでいたときのひもじい気持ちよ。

〈山田〉「馬返し蔦屋」は日光の馬返し地点にある蔦屋という宿のことのようだ。体調が優れないために日暮れとともに通りがかりの宿で休んだのだろう。イレギュラーなことだったので食事もとらずにいたのでひもじさを感じていたということだろうか。

〈田中〉「日光」に関する歌は、この後98から連作で収録されている。

85・敷き居たる野辺の草寝て起きもあへぬそのすなほさもみすてかねつ、

【初出】「白樺」四巻十一号(大正二年十一月)「うす黄の菊」

・敷き居たる野辺の草寝て起きもあへぬそのすなほさもみすてかねつ、

〈通釈〉(自分が)寝転んで敷いていた野辺の草が、寝たまま起ききれない、その素直さも見捨てられずにいる。

〈山田〉野辺に寝転んで全身で自然を楽しんでいるその素直さに魅了されているという歌。相聞歌であろうか。都会的な常識人の立場から自然児を愛でるような視点は、女性労働者や遊女に気を引かれる部分と通ずるところがある。

〈田中〉自分の身体の重みで「寝て」しまった野辺の草が、その姿勢のまま起き上がれないさまを、むしろ「すなほさ」

ととらえた視線が目新しい。

＊86・野は夕日百姓たちは黒土に鋤を打ち入れ打ち入れやまず

【初出】「白樺」四巻四号（大正二年四月）「空色花」そらいろばな 異同なし

〈通釈〉野は夕日に照らされている。百姓たちは黒土に鋤を打ち入れて打ち入れてやむことはない。

〈山田〉百姓を賛美的に詠む視点はそれまでの利玄にはみられなかったもので、新しさがある。「白樺」の生活賛美傾向に乗っているのかもしれない。夕日と黒土のコントラストが、ミレーの農村画を思わせる。

〈田中〉川田（1957）に、この歌の鑑賞文がある。「作者天性の温情の故か、『白樺』の人道主義に影響されたためか、或は又、殿様の道楽か、利玄には農人（彼は必ず百姓と詠んだ）の生活に興味を感じた歌がときどき出て来る。（中略）初句『野は夕日』は写真でなく、浪漫の句いをただよわせている」（四七頁）。

＊87・黒土をほればひそめる百合の根に冬の日ざしのまつはりに来る

【初出】「心の花」十七巻一号（大正二年一月）「草花」

・黒土をほればひそめる百合の根に冬の日ざしのまつはりて来る

〈通釈〉黒土を掘ったら潜んでいる百合の根に冬の日ざしがまとわり付いて来る。

〈山田〉黒土に白い百合の根のコントラスト、そこに暖かな冬の日ざし。生活の実感に基づいたような歌である。86の歌と同様の色彩感覚を用いている点が特徴的。

〈田中〉「明星」で多くの歌に使われた「百合」自体は夏の季語。だが、「百合の根」は冬を思わせるものである。あまり歌われない「百合の根」を見出したことが興をそそる。

「粉雪」

*88・明治屋のクリスマス飾り灯ともしてきらびやかなり粉雪降り出づ

【初出】「白樺」四卷一号(大正二年一月)「粉雪」異同なし

のち、「心の花」十七卷八号(大正二年八月) 曙会記事

・明治屋のクリスマス飾り灯ともしてきらびやかなり粉雪ふり出づ

〈通釈〉明治屋のクリスマスツリーの飾りに灯りがともつてきらびやかである。粉雪が降り出す。

〈山田〉明治屋は輸入高級食材の販売で知られる銀座の食料品店であり、現在も存続している。当時としては最先端と
思われるクリスマスツリーの飾りが、希望に沸き立つ時代の雰囲気とマッチしており、童話的かつ生き生きとした歌に
仕上がっている。おそらくクリスマスを短歌の題材とした最も早い例ではないだろうか。俵万智の歌集『チョコレート
革命』(一九九七年)にも「明治屋に初めて二人で行きし日の苺のジャムの一瓶終わる」という歌がある。

〈田中〉初出の「白樺」では、一頁にこの一首のみが掲載されており、視覚的にも印象深い歌である。初出ののち、大
正二年七月十三日に開催された曙会に出詠、題は「眠らむとして」「途上」「群」であった。

明治屋(明治十八年Ⅱ一八八五年、横浜で開業)は明治三十三年(一九〇〇年)に銀座に出店。その頃に「クリスマ
ス飾り」が登場した。明治三十七年(一九〇四年)には日露戦争勝利と増築祝いを兼ねて十二月十五日から毎晩イルミ
ネーションを点灯したという。

*89・きげんよくあびそてゐしが女の子たふれころびぬかたき大地に

【初出】「白樺」四卷十一号(大正二年十一月)「うす黄の菊」

・きげんよくあびそてゐしが女の子たふれころびぬかたき大地に

〈通釈〉機嫌よく遊んでいたけれど女の子が倒れて転んでしまった、かたい大地の上に。

〈山田〉初出が正しく、初版は誤植だろう。子供の動きを生き生きと捉えようとした歌。ひらがなの多用や上句の（當時としては）やや口語的な表現は、実際にこの女の子に読ませるために平易な表現にしようと思ったからではないかと感じられる。

〈田中〉川田（195）に、「童女だから、着物を余計に着ている。それで、元氣よく遊べば遊ぶほどころび易い。『かたき大地』にころんだのだから、わつという泣き声もきこえる。母親が飛び出してくる。利玄は、ふところ手して立つて見ている」（四六頁）と解説されている。

*** 90・冬の日**は壁と地面の直角に來りたまれりそれがよろしき

【初出】「白樺」五卷三号（大正三年三月）「空色の草ばな」

・冬の日**は壁と地面の直角にきたりたまれりそれがよろしき**

〈通釈〉冬の日の光は壁と地面の交差する直角の部分に來て溜まっている、それが実に良い。

〈山田〉徹底的に単純化して直線的に光を捉えるユニークな視点の歌。結句の唐突さが前半のシンプルさを打ち壊しユーモアを与えている。

〈田中〉初出は大正三年であり、歌集中で最も新しい作。校正を重ねるうちに、冬らしい一首としてここに配置したのだろう。

* 91・学校に初めてわれの入りし時廊下になさしく自家^{うち}をおもひき

【初出】「白樺」四巻四号（大正二年四月）「空色花」^{そらいろはな}

・学校に初めて我の入りし時廊下になさしく自家をおもひき

〈通釈〉私が初めて学校へ入ったとき、廊下にて悲しく自宅を思った。

〈山田〉幼さのあまりに自分の家が恋しくなったという単純な歌のようにも思えるが、利玄の孤独な幼少期を鑑みるとそれだけには留まらないように思う。「廊下」の長さが、一人で歩いていかなくはならない自分の不安をかきたてたのかもしれない。

〈田中〉明治二十五（一八九二）年九月に、学習院初等科に入学。のちの回想録「道」（新家庭）大正十一年八月号）に、「自家」についての次の記述がある。「家老の家なるKOと、旧臣で当時小学校の先生をしてゐたNSの二人に連れられて、私は故郷を立出づる事になりました。此以後、私は父母の膝下に暮すといふ事はもうありませんでした。（中略）東京に来てからの私の生活は実に潤ひのない寂しいものでした」。「潤ひのない寂しい」気持ちだが、「かなしく」と合致している。

92・門口にお鶴人形は膝なで、めぐみもふかき……………とうたひ居しかな

【初出】「白樺」四巻四号（大正二年四月）「空色花」^{そらいろはな}

・門口にお鶴人形は膝なで、「……………めぐみもふかき……………」とうたひ居しかな

〈通釈〉門口でお鶴人形は膝をなでて「めぐみもふかき……………」と歌っていたよ。

〈山田〉お鶴人形とは人形浄瑠璃「傾城阿波の鳴門」に使われる人形。「ちちははのめぐみも深き粉河寺ほとけのちかひたのもしのみや」という歌をうたう。利玄は卒論に近松門左衛門を選んでいるので浄瑠璃への造詣は深かったのだろ

う。幼少期を思う歌に続いて「ちちははのめぐみ」なる歌を引用するのは示唆に富んでいる。

〈田中〉「ちちははの」の部分をあえて省略することで、逆に、「ちちはは」こそがこの小題「粉雪」のテーマであることを伝えている。

93・大わた小わた日の暮れ方のうら寒み綿着て飛ぶか悲しい虫よ

【初出】「白樺」四巻一号（大正二年一月）「粉雪（夕月）」 異同なし

〈通釈〉大きな綿、小さな綿、日暮れ時が少々寒いので、綿を着て飛ぶか悲しい虫よ。

〈山田〉寒さの増してきた日暮れ時に綿虫を見かけ、寒いので綿を着て飛んでいるのかと擬人化して呼びかけている。

「大わた小わた」というわらべ唄のような囃子言葉や「悲しい虫よ」という口語表現が特徴的で、童話的な雰囲気がある。

〈田中〉曙会の詠草で、利玄の俗語表現には早くから注目が集まっていた。たとえば、明治四十二年五月の曙会で、利玄の「真菰風明方すしこの羽織着て行かしやんせ船ぢや寒かろ」について、石樽千亦が「俗語と三十一字、これ大問題なり」と発言している（「心の花」十三巻六号 明治四十二年六月）。93は、学齢児童の思いを述べるためにあえて俗語・口語で表現したのだろう。

* 94・夕月にみんなの影のうつり居る地をなつかしみ踏み／＼遊ぶ

【初出】「白樺」四巻一号（大正二年一月）「粉雪（夕月）」 異同なし

〈通釈〉夕月が照ってみんなの影が映っている地面を、なつかしみながら踏み踏み遊ぶ。

〈山田〉「みんなの影」と口語的表現がある。幼少時代の影踏み遊びをなつかしんでいる歌だろう。利玄の口語表現が「子供」「郷愁」とセットになって用いられることが多いのがわかる。

〈田中〉初出「粉雪」のうち、「夕月」の小題は全五首。93、「下駄裏の金具ちやらく敷石になるこの心地故郷にとぶ」(未収録)、94・95・97となっており、未収録歌からわかるように「故郷」を回想した一連であった。

95・遅くなれば月きらく／＼とやさしさのなきも悲しく自家に帰りき

【初出】「白樺」四巻一号(大正二年一月)「粉雪(夕月)」 異同なし

〈通釈〉遅い時間となれば月はきらきらとやさしさもなく、悲しく自宅に帰った。

〈山田〉家庭に孤独を感じていた幼少時代の回想の歌だろう。月がきらきらと輝くという明るい状況を「やさしさのなき」と捉えるねじれた感情に一層の孤独が見える。

〈田中〉「道」(前出)に、「私は女中下男ばかりの索漠たる家へ帰るのです。私は陰鬱な思ふ事も快活に云へない少年として育ちつつありました」とある。自家もまた、父母のあたたかな「やさしさ」のない場所だったことがうかがえる。

96・眼さむれば隣の室のはなし声そはわが上にかかはるらしも

【初出】「白樺」四巻四号(大正二年四月)「空色花」

・眼さむれば隣の室のはなし声そはわが上にかかはるらしも

〈通釈〉目が覚めれば隣の部屋からの話し声。それは私の身の上にかかわることらしいが。

〈山田〉自分が噂話の種になっているという、日常のはざまにあらわれたかすかな不安を描いている。ごく当たり前のことのように、なんとも嫌な気分も残る歌である。

〈田中〉下の句から、これまでも、自分の意思とは関係のないところでわが身の振り方が決められていたことがうかがえる。武者小路実篤は、利玄の高等科時代を回想し、「木下は小さい大名華族で三大夫がゐて、それが中々の忠義者で、

お家大事のがんこ爺で、木下はよく頭を押えつけられてゐた」と述べており（「不二」大正十四年四月号）、紅野敏郎「木下利玄——学習院中等科の日記——」（岩波書店「図書」三七五号、一九八〇年十一月）でも、足守藩二万五千石の大名の流れを継ぐだけに、毎年正月には朝から年賀に回り、午後は旧家臣から年賀の挨拶を受け、東京在住の旧足守藩の人々が催す親睦会にも参加しなければならなかったことが明かされている。

97・目に白く雪の見えつ、冬くればいよ、したしき軒ちかき山

【初出】「白樺」四卷一号（大正二年一月）「粉雪（夕月）」

・目に白く雪の見えつ、冬来ればいよ、親しき軒近き山

〈通釈〉目に白く雪が見えながら、冬が来ればいよいよ親しみの沸く（家の）軒に近い山である。

〈山田〉目に入ってくる白い雪が冬の到来を告げていて、山にしたしみが沸いたということだろう。「軒ちかき」の意味を汲み取りにくいが、自宅の軒と重なって見える遠くの山ということだろうか。

〈田中〉「山」を見ている作中主体は学齡の私であるため、視線の低さが、逆に「軒ちかき山」への親近感を与えている。季節を伝える里山への親愛の情。

（以下、次号に続く）